

日本語で〈アイ・ラブ・ユー〉をどう言うか

金谷 武洋

二〇一七年九月二日にオタワの在カナダ日本大使館の主催による文法講演会に講演者として招かれた。会場は日本語教育が高い評価を受けているカールトン大学。「効果的な日本語教育法」ワークショップでこれまで数回講師として招かれた大学である。講演のタイトルは「日本語でアイラブユーをどう言うか」として、述語制言語である日本語を、主語制言語の英語を比べながら対照的に紹介したのだが、お陰様で大好評に終わり、最後には会場が盛大な拍手で包まれた。以下、当日の心の高まりを思い出しながら、講演内容を振り返ってみよう。

皆さん、こんにちは。こんなに大勢の人たちに来てくださって感激です。只今のご紹介にもありましたように、私は二十五年前、モントリオール大学で日本語を教えていましたが、五年前の二〇一二年に退官しました。一九八七年から現在まで三十年もモントリオールに住んでいますので、普段はフランス語を話してい

ます。母語が日本語、そして日常生活ではほぼ100%フランス語ですから、英語は私にとって三番目の言語、二番目の外国語となります。話しているうちに耳障りな間違いもあちこちですると思いますが、どうぞご寛容にお許しください。(激励の拍手。「大丈夫!」の声援も)

私が日本語教師になったきっかけ

まず、どういふわけで私が日本語をカナダで教えることになったのか、そのきっかけをお話ししましょう。それは四十年前の一九七七年九月のことでした。私は当時二六歳です。その二年前にカナダのケベック州にあるラヴァル大学に留学生としてやってきたのですが、とてもケベック州でのキャンパス生活が気に入って、しばらくカナダに住んでみようと思いました。ケベックの人たちの笑顔と優しさ、そして山を真っ赤に染め上げる紅葉の美しさにすっかり魅了されてしまったのです。日本では生まれも育ち

も北海道ですから、冬には慣れていきます。着いた翌年からは連良く州政府から奨学金が貰えましたし、前の年の一九七六年に近くのアール・ピットでオリンピックがあり、読売新聞で使い走りのアルバイトを二か月ほどやって少し蓄えもできたので、まだ向こう数年は大丈夫と思えました。とは言っても、経済的には決して豊かでなく、無駄遣いはできません。常に不安でした。当時、ケベック市内のギリシャ・レストランで皿洗いのアルバイトをやっていた一番大きな理由は食費を浮かすためです。最低賃金でしたが、仕事の合間に少なくとも無料で食べられて大いに助かったのを覚えています。

そんなある日、九月始めの金曜日でしたが、大学の教務課から思いもよらない電話が入りました。受話器を取ると、いきなりこう聞かれたのです。「あのう、ムッシュ・カナヤは日本人ですよね。」「はい」と答えると「それじゃ、日本語を教えることは出来ませんか」と尋ねられました。その後のやり取りの中で、大学が困っているのだと分かりました。秋学期に日本語を教えることになっていた人物と急に連絡が取れなくなったのだそうです。私はその時点で既に一年以上ケベック市に住んでいて、二つ目の学十号を終わろうとしていました。その後は言語学の修士課程に進もうと決めたばかりだったので、それは突然降って湧いた、夢のような朗報でした。興奮を抑えながら「是非やらせてください」と即答しました。その後、ふと気になって「授業はいつから始まるのですか」と聞くと、「来週の月曜から」と答えるではありませんか。その日は金曜日でしたから、授業開始までたったの三日

しかありません。外国語としての日本語を教えた経験もなかった私に、二十四人の学生のクラスをその週末だけで準備すると言うのです。それは大変な仕事でしたが、とりあえずは平仮名と「日常表現」から始めて、すこしずつ文法を教えていこうと決めました。すると、まさにその「日常表現」から、私にとつての「日本語再発見の旅」が始まったのです。この一本の電話が私の人生を変えたと言ってもいいでしょう。私が今日、こうして皆さんの前で話しているのも、そのありがたい電話のお陰なのです。

日本語の日常表現に驚く学生達

好奇心あふれる若いケベックの学生からの多くの質問が私の目を開かせてくれました。先ず感謝の「ありがとう（ごさいます）」を教え、次に文の形がよく似た「お早う（ごさいます）」に移った時に数人の学生の手が上がりました。「この二つの文は形がよく似てますね。それぞれの元の意味は何ですか」と言うのです。それで、ちよつと考えて、本来の意味はそれぞれ「有り難い（＝なかなかないこと）です（ね）」と「まだ、朝早いですね」と言う意味だと答えました。するとクラスの学生がとても驚いたのです。「えっ、人間が一人も出て来ないんですか。英語やフランス語と全然違うんですね」と。意外な反応で、今度はこちらも驚きました。

こうした日本語教育の現場で受けた衝撃が私を日本語教師と文法研究家に育ててくれたのだと今でも思っています。何が一番違

うかと言うと、それは学生が言った通りです。英語やフランス語では朝の挨拶や感謝の言葉には「人」がいるのが、日本語にはいないという違いです。Thank you の「You」がそうですし、Good morning は本来「I wish YOU a good morning」でしたから、やはり話者①とその目の前にいる聞き手(YOU)が感じられます。サンキューだって元々は「I thank you」でしたから「私」も「あなた」もいたのです。ところが、日本語では「ありがとう」にも「お早う」にも「わたし」や「あなた」は不在だという事実にはケベツクの学生は驚いていました。それまでこんな違いについて考えたこともなかったので、私にも大きな衝撃でした。これは一体どういうことなのか、なぜ日本語は英仏語などこんな違いに違っているのか、と新米教師の私は考えました。それと同時に、私はあることに気がついて興奮もしていました。こんなにも違っている理由の根っこを捕まえれば、修士論文は書ける、と自信を持ったのです。そしてその通りになりました。

人が出てこない日常表現は「ありがとう」と「おはよう」だけではありません。別れの挨拶「さようなら」もそうです。英語の「Good by」は本来「God be with ye (神があなたとありますように)」でした。Ye とは古い英語の俗語で今の You と同じ意味ですから、この挨拶には「あなた」だけでなく「神様」までいたのです。日本語の「さようなら」には誰も出て来ません。意味は何ともあつけない「そのようなら」です。今日ではこれがもつと簡単になつて「それじゃ」や「じゃね」などと言いますね。でも、意味は全く同じです。待映画に出てくる「さらば」も「さ、あらば」で「さ

ようなら」と同じ意味ですし、この「さ、あらば」に「よ」がついた「さあらばよ」は形が崩れて、こちらは同じ時代の町人がゆく使った「あばよ」になりました。「さようなら、あばよ、さらば、じゃね、それじゃ」、これらは、どれも発想は同じということです。つまり、昔から一貫して日本人の別れの挨拶には人が出てこないのです。

次に学生が驚いたのは、初めて誰かと会った時の表現、「初めてまして」でした。この状況でも英語では「How do YOU do?」とやはり「あなた」が登場します。日本語に直訳したら「あなたは どうしますか」となってしまいます。これではとても日本語の初対面のことにはなりません。これを逆方向で日本語の「はじめまして」を無理にそのまま英語にしたらどうか。「We will start. Let's start」とでもなるでしょうか、そんなことを言われた英語話者は返事に困るしかありません。

最初の三つの文、「おはよう」「ありがとう」「さようなら」とそれに対応する英語文を比べて「英語の文には人間が出て来るが、日本語の文にはいない」ということが分かりましたが、「How do you do?」でもそれは全く同じで、相手がどうするかを聞くのが英語の初対面の挨拶であるということでした。「おはよう」や「ありがとう」と違って「はじめまして」には動詞がありますが、その動詞の行為者は出てきません。「何故日本語の文にはあまり人間が出てこないのか」。それが私の文法研究の出発点となったのです。

私は日本語を教えた早い段階で、日本人の基本的な「立ち

位置」が英語や仏語の話者と違っているのでは、と見当をつけました。対話をしている二人がそこにいるはずなのに、話し手も聞き手も文に出てこないのは、同じ方向を見て、互いに向かい合っていないせいではないか、と見当をつけたのです。例えば、「お早う」の場合、二人が見ているのは、おそらく外の景色です。例えばまだ太陽が上がりきらずに地平線に顔を出した様子を二人が並んで見ているのです。そして「まだ朝早い」という状況に二人が感動して、心を合わせている気持ちがおはようございますの表現となったのでしょうか。別の言葉で言うと、二人はそこで「共感」しているのです。ですから聞き手も今度は話し手となって「お早う」と答えるのです。

そんな風に説明すると、ようやくクラスの学生たちも納得してくれた様子で安心しました。これに続いて、私は文学や日本人の仕草や声、さらに絵画や文学にも、日常表現の違いと共通するような違いが日本と西洋に見られるのではないかと見当をつけました。そして、案の定、次々に発見できたのです。それをいくつかご紹介しましょう。

短歌や歌詞にも見られる「共感」の思想

ここで私の好きな歌人、俵万智さんの次の短歌を一つ皆さんにご紹介したいと思います。この歌人の代表的な作品で、日本人の間によく知られた短歌です。

「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいる暖かさ

(サラダ記念日) 河出書房、一九八七年

お気づきでしょうか。上で見た「ありがとう」も「おはよう」も結局この歌の「寒いね」と同じ気持ちの表現だと私は思います。この歌で「寒いね」と話しかけた人と、「寒いね」と答えた人は、実は向かい合っていないません。向かい合うのではなく、むしろ同じ方向、例えば雪の積もった庭を見て、その寒そうな景色に「共感」し、心を通わせているのです。そうすることで、気持ちが一つになった感動を俵さんは「寒い」とはちようど反対の「暖かい」と言い表しました。勿論、暖かいのは温度が上がったからではありません。二人が感動し合ったからです。何と素晴らしい歌でしょうか。上で見たように、「まだ早いね」と声をかけるのが「お早う」の気持ちですし、「なかなかいいことですね」なら「ありがとう」で、やはりどちらも同じ方向を向いて感動した表現でした。それが平成の現代まで生き残ったのです。

さて、お互いを見合うのではなく、心を通わせるために二人が同じ方向を見ようとすると、不思議なことが起きます。相手と並ぶことで相手が視界からいなくなるのです。日常表現を比べて気がついた「英語の文には人間が出て来るのに、日本語の文にはいない」のはそのためと断言していいでしょう。

俵万智さんに続いて、もう一つ皆さんにご紹介したい日本人がいます。若い時はフォークソングを歌っていたのですが、その後、九州大学の精神分析医学教授になった北山修さんです。一九七〇

年代にとても有名だった「フォーク・クルセダーズ」という京都出身の三人組のフォーク・グループでベースを弾いていたのが北山さんでした。そしてこのグループのほとんどの歌の作詞も北山さんの担当です。「帰ってきたヨッパライ」という歌が大ヒットしたのは一九六八年。その時、私は北海道函館市にある函館フ・サール高校の二年生でした。フォークルの数多いヒット曲の中に「あの素晴らしい愛をもう一度」という歌があります。ちよっとその一部をご紹介します。

♪あのととき同じ花を見て美しいといった

ふたりの心と心が今はもう通わない

あの素晴らしい愛をもう一度

あの素晴らしい愛をもう一度

上で述べたように、北山さんはその後、精神科医学が専門の大学の先生になりましたが、「共視論」(講談社選書メチエ、二〇〇五年)というタイトルの本を出されています。ともに心を動かすことを「共感」と言うなら、ともに同じ方向に視線を向けることは「共視」と確かに言えるでしょう。ここでは、「以前は同じものを見て、二人が通わせていた心」が失われた悲しさが歌われていますが、この心こそは私が日本語の日常表現を通じて気付いたことと全く同じです。つまり「日本人は心を合わせる時に、見つめ合うのではなく、並んで同じものを見る」ということなのです。先ほどご紹介した俵万智さんの和歌に戻れば、そうした共感を失うこ

とは「寒いね」と言っても「寒いね」と答えてくれる人がいない悲しさなのです。

北山さんは、江戸時代の浮世絵で母親と幼い子供が描かれているものに、何か不安定なものを母親が子供に見せているデザインが多いと指摘しています。そして、日本人の「愛」は視線を同じ方向に向ける、この母親と幼い子供のイメージが基本にあるととても大切なことを教えてくれます。そう言えば、日本の恋愛映画でも愛する二人はよく同じ方向、例えば浜辺に立つて沈む夕陽を眺めているという光景でクライマックスを迎え、テーマ音楽もここぞと大きく演奏されてスクリーンに「終り」が出て来ることに気付きませす。ハリウッド映画はそうはいきませせん。お互いに見つめ合って、次の瞬間、燃える様なキスを交わし、そこでようやく「The End」となります。(アメリカ映画の「カサブランカ」「風とともに去りぬ」と、日本映画の「東京物語」「かもめ食堂」のポスターを見せて視線を比較する)

声と視線も大違い

他のアジア諸国と比べても、日本人は英語が苦手だとよく言われます。でもその大きな理由の一つが日本人の「声」であることはあまり指摘されていません。書店に出回っている英会話の本は、単語やイディオム集といったものが多いように見受けられますが、それはFacts(事実)で、それと並んでActs(演技)の重要性を忘れてはいけません。

日本人の声は、近くなるやと聞きとれるものが多く、英語のように「自己主張」をするために、子供の時から意図的に訓練した声とは全く違ったものです。日本人の声が遠くへ届かないことは通訳を交えた会議などでも絶望的で、よく言われる日本人会議参加者の「3s」つまり「沈黙(silence)」「微笑(smile)」そして「居眠り(sleep)」もその第一の理由は、せっかくな大言発言をしても他の参加者に聞きとってもらえず、内容はともかく声の大きな人の方に注意を横取りされてしまうことが多いからです。私はカナダや日本で何度も日仏や日英の通訳をしてきましたが、そうした場面にしばしば出くわして悔しい思いをしたものです。「もつと声を出して!」と叫びたくなることが何度もありました。

皆さんもご存知だと思いますが、英語話者は金属的音音色とも呼びたいような声を出して話しますよね。これが実に遠くへ届くのです。実は西洋には「骨音響学(Osteophony)」という分野の学問があつて、人が音声を発する時に自分の身体の中の部分を共鳴箱として使うかもその研究分野の一つです。それによれば英語は主に頭蓋骨を響かせるようで、そうすれば周波数が高くなるのです。典型的にはオペラ歌手の歌い方がそうで、その為に、ステージの上でマイクを使わなくても舞台から歌声は劇場の奥まで届くのです。

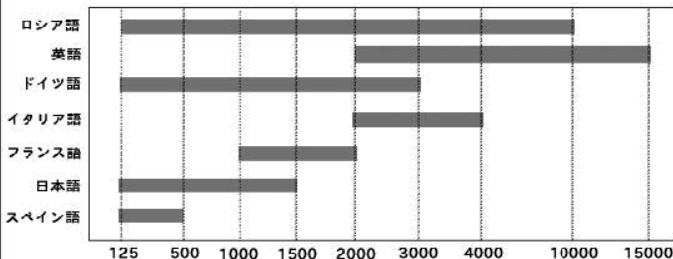
これに比べて、日本語の話者が響かせるのはそれより身体のずっと下方の胸や腹で、そうすると共鳴度自体はるかに弱くなります。それでは実際に骨音響学の専門家が実験室で音響機械を使つて測定したいいくつかの言語の平均的な周波数(もちろん幅が

ありますが)を次に比べてみましょう。

この表を見るとまさに一目瞭然です。日本語と英語は隔絶しています。日本語の音声の周波数で125から1500ヘルツ、それに対して英語は2000から15000ヘルツと日本語の最高より英語の最低が上という、まさにかけ離れた音域です。つまり、日本人は英語を話す際に、舞台俳優かオペラ歌手になったつもりで、よほど意識的に努力して「頭のてっぺんから出さ」ないと英語話者のような「遠くへ届く声」を出せないのです。

実はこうした発声を英語話者は子供のときに意図的に訓練することを友人が教えてくれました。ちゃんとしたプログラムがあるので。直訳すれば声の放出テクニック

▼以下の表はその研究の一部ですが、(各言語の周波数表です)



(Voice Projection Technique) とでも呼ぶべき発声法の理論とその実践で子供たちは訓練され、ようやく「遠くへ飛ばす」声が出せるようになるのです。テクニクとしては音量よりもむしろ音質で、頭蓋骨を共鳴させる金属的な音がこうして習得されるわけです。

上の表には出て来ませんが、インターネットで検索すると中国語は500から3000ヘルツでしたから、日本語と英語の間にあります。この科学的データも、中国人の方が英語の上達が日本人より速い理由の一つだと言えるでしょう。もちろん、それだけではなく、基本文の構造という大切な点でも英語と似ているのは中国語で、日本語ではありません。中国語の「ウオー・アイ・ニー」は、まさに語順もそのままで「アイ・ラブ・ユー」を意味します。

私はモントリオールという街に住んでいるのですが、川を渡ってよくモントリオールへ行きます。その際の交通手段は主に地下鉄です。地下鉄の中では一人の場合、大抵本を読んでいる事が多いのですが、ある日、面白い事に気がつきました。本を読んでいる「周りがうるさいなあ」と思う時が時々あると、それは間違いなく英語、あるいは中国語のどちらかだということです。この街で一番話す人が多いフランス語の場合はほとんど気になりませんが、英語だと聞きたくもない会話が耳に入って来ますので、うるさくて本が読めないのです。あまりうるさいので一度、口に指を当てて「しっ」と言ってみたことがありますが、向こうが、注意される理由が分からないという驚いた顔をされて、こちらが驚きました。考えてみれば英語話者なら誰でもこんな声で話すわけで

すから、当然と言えば当然な反応です。

声の大きさと英語と似ているのが中国語です。やはり一度、日本人ならどちらにも「ぶち切れ」て怒りまくっているような声だったので、私はてっきり大喧嘩をしているのだと思いました。本から目を離して声の来る方向を見ますとなんのことはない、興奮して「話し合つて」はいますが、「怒鳴り合つて」喧嘩をしてはいませんでした。こういう話し方が当たり前の、英語話者や中国語話者の本人達は自分たちの声が周りの人の本を読めなくしているなどとは思いつかないのです。

このように、英語と中国語は声の大きさと周波数が近いことも、日本人より中国人が英語を早くマスター出来る理由だと私は思います。彼らは、勿論、バスや電車の中でも平気で携帯電話を使います。大声で話しています。ちなみに、電車やバスの中で携帯電話を使うことを遠慮する文化は日本ぐらいなもので、私など久しぶりに日本へ帰って来ると車内の静かなことに毎回驚かされます。新幹線の前の座席に日本語で「携帯はマナーモードでお願いします」というようなことが書いてあり、マナー・モードはサイレント・モードと英訳されていました。静寂がマナーであると英語話者は必ずしも考えないので、わざわざ「沈黙モード」と言わないといけないからでしょう。

発声と並んで重要なポイントが視線です。先ほども映画のポスターでその違いを見ました。多くの日本人は「相手の目を見つめること」を失礼と思いますが、その逆に「相手の目を見て話さない」方が西洋人には失礼なのです。第一、道で知人と会った時に、日

本人ならよく会釈をします。会釈とは「にこやかにうなづく」ことです。さらに敬意を表するなら、立ち止まって、顔だけでなく身体全体を前に折りますね、こうすると「お辞儀」になります。

これに対して、西洋なら身体を反らす方向が正反対です。前ではなく後ろで、典型的には、胸を反らして「アゴを突き上げ、「ハイ」というような大声を発して、相手の方を向いたまま近づいてきます。もちろん視線は相手を直視したままです。日本人がお辞儀をするのは、相手を直視しないという意味表示でもあるのかも知れません。

自分を小さく見せようとする日本語話者、逆に大きく見せようとする英語話者。そして、そのことと言葉は深く結びついていきます。少し後で、人類学者のレヴィ・ストロースの話をしますが、「自分を押し出す西洋」と「自分の方に引き寄せる日本」の対立が言葉にも身振りにも並行して現れるのです。大河ドラマなどで「時代劇」を見てみると、目下が目上に対して「恐悦至極に存じます」「恐れ多くも上様は」「恐れ入った次第」などとさかんに畏まつていることがわかります。これは日本人の意識の深いところで敬意の底に「恐怖・恐れ」があることの証拠だと私は思います。江戸時代の大名行列では「下にい、下にい」と庶民に頭を下げさせました。

平成の現代日本でも、初対面の人、あるいは目上の人には敬意を表したいと思うものですから、視線を相手からそらすのはごく自然なことと言えるでしょう。自分の顔をじろじろ見られると確かに不愉快ですし、任侠世界のお兄さんたちなら「貴様、ガン飛

ばしたろ」とか「何だよ。ガンつけやがって」などと因縁をつけられそうところです。私は教え子が痛い目に会うのではない心配で、出発前には必ず「相手の目を見つめたらダメだよ」とアドバイスしていました。

相手の目を見ることそれ自体は、良くも悪くもありません。大切なのは、英語を母語にする話者は大きくよく通る声で相手の目を見て話すし、日本語の母語話者はそうしないという文化的な違いを認め、理解して「郷に行つては郷に従え」の教えの通り、相手の土俵にのぼることなのです。つまり、英語を身につけるためには、日本的な慎み深さや遠慮は意識的に忘れ、オペラ歌手や俳優になったつもりで「英語話者の役を演じて」、その後は日本人の自分に素早く戻つてくればいいのです。このことを私は教え子たちに「川を渡る」イメージで説明してきました。私が毎日セントローレンス川を渡つて大学に通つていたことも関係しているかもしれませんが。日本と英語の両方が自然に話せる人は、上手にこちらの岸へ渡つて演技を楽しみ、それが終わつたらひよいと川を渡つて戻つてくるのが出来ます。

さて、最初に取り上げたさまざまな「日常表現」や、その後で紹介した北山修さんの歌詞、「あの素晴らしい愛をもう一度」と俵万智さんの短歌をここで思い出して下さい。そこでは「共視」の大切さが語られていました。「相手を直視」しようとしないう日本人の傾向は「共視」と大変よく似ています。結局、言葉とは文化そのものなのです。言葉は仕草や振る舞いと同じ方向を向いていると言つていいでしょう。

さて今日の中心テーマである「日本語と英仏語の基本文構造の違い」に入る前に、私の背中をさらに押ししてくれた「二つの発見」についてお話しします。

地名の違い

そうです。発見は二つありました。最初の発見は地名です。カナダの地名の多くが日本語の発想に似てると気がついたのです。面白いことに、英語やフランス語が語源のものと、先住民族の言葉が語源になったものの両方が共存します。例えば、ここは首都であるオタワですが、どういう意味かご存知ですか。(何人か手を挙げるので尋ねると正解が返ってきた)

はい、よくご存知ですね。正解です。オタワは「交易をする場所」という意味ですね。でも、ご承知のように、オタワという地名は英語ではありません。先住民族の言葉です。首都オタワのある州はオンタリオですよ。これは「美しく輝く水」という素敵な意味の地名です。オンタリオ州のお隣が私の住むケベック州ですが、こちらも先住民の言葉で「川幅が狭くなる所」の意味です。これは州都のケベック市がセントローレンス河の狭くなったところに位置しているからです。ちなみに、日本にもそれによく似た「瀬戸」という地名があるんですよ。これも元々は「狭いところ」の意味でした。滝で有名なナイアガラの意味は「水の轟き」です。そもそも国名のカナダだって先住民族の言葉ですが、その意味を知っていますか。何と「村」だったんですよ。皆さん、カナダの

面積は日本の二十七倍もあるんですよ。こんなに広大な国の名前が「村」とはまるでジョークじゃないでしょうか。カナダが村なら日本は何でしょう。「村役場」とか? (爆笑)

また、カナダで人口が一番多い街はトロントです。トロントの意味は「人が会う所」でした。こうしてみると東部カナダには先住民族の言葉がまだ残って使われ続けている傾向があるようです。カナダ西部の地名は、先住民族のものがあつたのですが、ほとんど英語の言葉に置き換えられてしまったのです。

カナダ東部の多くの地名に、人の名前は使われていないことを知った私は、最初にお話しした「人があまり出て来ない日本語」とよく似ていることに驚いたのです。そして、日常会話でも「わたし」や「あなた」があちこちに出てきた英語では、地名でもやはり人間中心となります。偉人や有名人の名前が、好んで都市や山や大通りに付けられてしまうのです。たとえば、日本人の観光客もよく訪れる西海岸にはバンクーバーやピクトリアという名前の街がありますが、これは二つとも明らかに人名です。バンクーバーは十八世紀にイギリス人探検家で船長のジェームズ・クックを案内してこの街にやってきた、やはりイギリス人探検家のジョージ・バンクーバーを記念した地名です。ピクトリアも同様で、よく知られているように、こちらは十九世紀に六十四年間の長きにわたって英国の女王だったピクトリア女王の名前です。カナダの西部に英語の地名が多いのは、歴史的な理由があります。ケベック州やオンタリオ州に代表される東部カナダの方がヨーロッパ人の植民が早かったからです。初期にはフランスからの植

民者が先住民族(特にヒューロン族)と同盟関係を結んでいたこと。この二つから、当時既に先住民族の言葉で呼ばれていた地名がそのまま残ったのです。これに対して、西部カナダは開発が遅れ、既に英語系カナダ人の支配が定着した後でカナダ連邦に加わりましたので、支配者である英語系カナダ人は遠慮なくそれまでの先住民族の言葉の地名を英語に代えて行っただけです。それがいいことだったのか、いけないことだったのかは皆さんがご自分でお考えください。

カナダの地名に関して、私がちよつと悲しくなったエピソードをお話ししましょう。カナダ西部のロッキーマウン脈にある美しい湖の話です。「ロッキーマウンの宝石」とも呼ばれるその湖の名前は「レイク・ルーズ」、皆さんもぎつと訪れたことがあるでしょう。ラヴァル大学の学生だった頃、私は二年続けて夏休みのアルバイトで日本人観光客相手の観光ガイドをしました。日本から来た多くのお客様を必ず連れて行っただけで、この「レイク・ルーズ」です。ところが、後になって、元々は先住民族の言葉で呼ばれていたという事実を知りました。そして、その言葉の意味は「小さな魚のいる水」だったのです。ところが、この湖を(意図的に)カックツキの言葉にしていることをジェスチャーで示しながら「発見した」白人によって、その名前が変えられてしまったのです。つまり改名ですね。では、ルーズとは誰かと言うと、それはヴィクトリア女王の娘のルーズ王女でした。その夫が当時、英国王室を代表する「カナダ総督」を勤めていたのです。

さて、皆さんにお聞きします。こうした改名、つまり地名の変

更をどう思われますか。最初にあつた先住民の言葉の意味が英語に翻訳されたものではありません。そこがどんな場所であるかを具体的に説明した地名が全く無視されて、英語系カナダ人によって一方的に人名に代えられたと言えるでしょう。私がこのエピソードを知って思い出したのは、長年にわたって、カナダの先住民の子供達を親から取り上げて寄宿舎のある学校に送り込み、生徒同士で母語で話したら罰を与えて、英語を無理矢理に教え込んだカナダの暗い歴史とつながっています。こうして今では殆どの先住民族が英語やフランス語の話者となり、先祖代々の言葉と文化は失われてしまったのです。今、カナダのジャスティン・トリュドー首相は「文化的大虐殺(Cultural genocide)」という強烈な言葉まで使つて、必死になつて先住民族の文化を復興させようとして取り組んでいます。失われたものはあまりに大きいと言わざるを得ません。(誰かが拍手し、それに続いて大きな拍手になる。)

さて、カナダの先住民と同様に、日本人も、ある有名人がその土地の出身者でも、土地の名前がその人の名前にするのは殆どないのです。地名には山や海、川の名前も含まれます。富士山も琵琶湖も日本海も隅田川もそうです。これらはこれから何百年後も同じ名前と呼ばれることでしょう。

苗字の違い

先ほど、発見は二つだった、と言いましたが、地名の次は人名、それも苗字でした。日本人の苗字にはどんなものが多いかご存知

ですか？多くはその家族が昔から住んでいた土地の様子と関係があります。例えば大きな山があると、その入り口に「山口」さん、山を見上げる位置にあるふもとは「山本、山下」さん、分け入った山の中なら「山中」さん、降りてくる方向には「山出」さん、などです。日本人は昔から主食としてお米を食べて来ましたから「田」も大切なキーワードです。たんぼと先祖の家の位置関係によって「田中、上田、下田、中田、田口」それからたんぼの大きさによって「大田、太田、小田」、たんぼと他のものの組み合わせで「山田、川田、宮田、橋田」など、ほとんど限りがないという感じですね。たんぼの近くに生えていた木によっては「杉田さん、桜田さん、柳田さん、梅田さん」など、いくらでも可能です。さて、ここで皆さんにクイズです。皆さんは「ホンダ、マツダ、トヨタ」と聞いて、ある共通点に気づかれますか。はい、その方はいは正解です。三つとも日本車のメーカーの名前ですね。でも他にもう二つ共通点があるんですよ。まず、この三つの会社の名前は何れも全て創業者の苗字でした。そして最後に、「た」は「た」と同じで、これは先ほどの「田中さんの田」です。つまりお米を作る「たんぼ」のことでした。

それでは次に英語の苗字はどうなっているのかを見てみましょう。インターネットで調べてみたら、アメリカ人の苗字の上から10位が分かりました。やはり予想通りで、これらの苗字に「場所」や「地名」は皆無でした。ただの一つもなし。そこにあるのは100%「人間」なのです。ここに10の「最もアメリカに多い」苗字をお見せしますので、日本人の苗字と同様にそ

れらの意味や語源を一緒に考えてみてください。

- ① Smith
- ② Johnson
- ③ Williams
- ④ Brown
- ⑤ Jones
- ⑥ Miller
- ⑦ Davis
- ⑧ Wilson
- ⑨ Anderson
- ⑩ Taylor

いかがでしょうか。日本人の代表的な苗字とこれほどまでに違うとは、全く驚くほかありませんね。ひとこと言えば、日本人の苗字は場所、つまり「祖先はどこに住んでいたか」に注目しますが、アメリカ人は「祖先はどんな人だったか」が大切だということです。つまり苗字に関しては「場所の日本語」、「人の英語」と言えます。やはりここでも、人が出てこないのが日本語なのです。

「どんな人だったか」の最初のグループは「どんな仕事をしていたか」です。つまり職業が苗字になりました。第一位の「スミスさん」は小文字の smith と書けばそのまま普通名詞の「鍛冶屋さん」ですし、六位の「ミラーさん」もそのままで粉屋（製粉業）さんです。十位の「テイラーさん」は普通名詞では今「tailor」と書かれるようになっていますが、服の「仕立て屋」さんです。

ベストテンの内三つの苗字が職業ですが、次のグループの「どんな人だったか」で問題となるのは「その父親は誰だったか」です。「苗字 (Family name)」には「父称 (Patronym)」という別の言い方があるくらいで、英語だけでなく、フランス語やドイツ語など西洋の多くの言語でしばしば見られることなのです。先ず苗字に「son」が付くのは父親のファーストネームに普通名詞の

「息子(son)」をつけたものです。ここでは「Johnson、Wilson、Anderson」の三つがベストテン入りをしています。この順番に「ジョン、ウィリアム(略してウィル)、アンドリュー」が父親の名前でした。

父親のファーストネームの後に「息子(son)」の代わりに「所有格のs」がつくグループもあります。つまり「ジョン・ソン(=ジョンの息子)」の代わりに「ジョンズ(=ジョンの)」と言うわけです。このタイプには「Jones、Williams、Davis」が上位10の苗字に入っています。最後のDavisは「タイプ」の(息子)ですが、デイブとはデイビッド(David)の愛称ですね。ウィリアムがウィルやウィリーと短くなるのと同じです。以前、アメリカにニクソンという大統領がいましたね。「Nixon」というスペルで書いてしまうので分かりにくくなっていますが、これも元々は「ニックの息子」の「Nicksen」でした。ニックはニコラス、ニコルのことですから、「ニコルソン」という別の言い方も可能になります。

10の苗字の内、職業が三つ、父称が六つありました。一つだけ異色なのが四位の「ブラウン」です。これは形容詞の「茶色い、日焼けした(brown)」と同じで、祖先の身体の特徴、おそらく完全な白人ではなく、浅黒い肌の人だったのでしょうか。つまりここでも「どんな人か」というその人のことに注目した苗字なのです。日本人のように、「どこに住んでいたか」という場所や地名の苗字は全くここにはありません。

こうした、あまり人間の行為を重視しないように思えた日本文化のさまざまな状況と日本語の関係を探りたいと思ったのが後の

修士論文、博士論文になりました。こうして次に向かったのが日本語と英仏語の基本文、つまり構文の比較です。

サピア・ウオーフの仮説

でもその前にちよつとだけ回り道をして、私の文法研究を支えてくれた学者を三名、ご紹介させていただきます。これら三人の学者は、紹介する順に、アメリカ人、フランス人、そして日本人です。つまり、カナダ人は一人もいないのですが、面白いことに、全員何らかの形でカナダと関係があるんです。ではまずこの人です。(サピアの写真をスクリーンに写して) 皆さんはこの人が誰か、ご存知ですか? おや残念、今度は誰も手を挙げてくれませんね。これは、これからご紹介する「サピア・ウオーフの仮説」を提唱した一人です。アメリカ人の言語学者で、名前はエドワード・サピアです。このサピア先生、実はここオタワ市ととても深い縁があるんですよ。二六歳から四一歳までの十五年も住んでいたんです。一番重要な業績である「言語…ことばの研究序説」もそのオタワ時代の一九二一年に書かれました。もう一人のウオーフというのはサピアがオタワを去ってアメリカに戻り、名門イェール大学で言語学を教え始めた時に学生だった人です。教授と学生が協力して一つの学説を広めたというのですから、実に美しい話ですね。ただ、師弟が二人とも若くして病気で亡くなったのが残念です。サピアは五五歳、ウオーフは四四歳で亡くなりましたから、二人合わせても百歳になりません。

二人が提唱した「サピア・ウォーフの仮説」は、一言で言うと、私たちの思考方法は、自分が母語として話す言語に左右されるという主張です。「言語相対性」と呼ばれることもあります。サピアはオタワ時代に、今では川向こうのガチノー市に移転したカナダ文明博物館の前身であるカナダ国立博物館に人類学科主任として勤務していました。そして没頭したのがカナダの先住民族の言語と文化だったのです。サピアは北米インディアンの話すことばの構造が英語やフランス語と全く違っていることに驚き、それが彼らの文化に色濃く反映されていると主張しました。言語が文化を「決定する」と言うのは過激すぎますので、「影響を与える」というやや無難な言い方になっています。

カナダの先住民と日本人の共通点

サピアの本を読んで私は心を打たれました。というのは、カナダの先住民たちの風俗や言語に日本人や日本語との共通点を感じることが既に何度かあったからです。まず仕草についてですが、例えばイヌイット（差別的表現であることが知られていない日本では、今日でもエスキモーと呼ばれています）の母親は赤ちゃんを背中におんぶするのがよく知られています。日本と同じで、北山修の指摘した「共視の母子像」がイヌイットにも伝統的に見られるのです。第二に、カナダ東部に今でも多く残っている現住民族の言葉の地名にほとんど人が出てこない、という事実が私の注意を引きました。

最初に日常表現の比較で見えてきたように、日本語の文にはあまり人間が登場しません。英語やフランス語はその逆です。こういう違いが日常表現にも、映画のシーンや短歌、フォークソングの歌詞、さらには視線や声にまで影響を及ぼしているのではないかと私は考えたのです。そして、それを決定づける証拠が言葉の違い、それも基本文のパターンの違いにあるのではないかと目をつけました。こうして、修士論文の方向性がだんだん固まってきました。

レヴィー・ストロースの構造主義

さきほど、私が大きく影響をうけた学者が三名いたと言いました。最初の学者はサピア・ウォーフの仮説で有名なサピアですが、次の二人目が誰だったかをお話しします。それはフランス人で人類学者レヴィー・ストロースです。（スクリーンに写真）この人ですね。先ほどのサピアは五五歳で若く亡くなりましたが、レヴィー・ストロースは驚くほど長命でした。亡くなったのはつい最近の二〇〇九年で、ちょうど百歳でした。サピアとウォーフを足しても及ばないほど長生きしたのです。ご存知の人も多いでしょう。人類学者レヴィー・ストロースが主張して学界に大ブームを巻き起こしたのが構造主義(Structuralisme)でした。その古典的名著『親族の基本構造』(1941)で見事に解明してみせた近親婚のタブーですが、それと並行するような無意識の、しかし体系的な構造が日本語にもあるのではないかと私は思ったのです。この構造が

未だに正しく理解されてはいない理由は、日本語の文法が明治維新以降、ずっと英文法を真似てきたせいではないかと目をつけました。

構造主義とは、レヴィ・ストロースと同時代に知的巨人と目されたジャンポール・サルトルの実存主義が「個人の能動的な主体性」を当然のこととして、集団の連なり、あるいは「場」から切り離された「自由」をあまりに強調しすぎたことに対する反論と挑戦だったのです。私がレヴィ・ストロースの構造主義に魅了された個人的な理由がありました。それでは、この人類学者とカナダの関係は何かをお話ししましょう。実は、この学者が三十年程前にケベック市へやってきたのです。そしてラヴァル大学で講演をしました。実際にその声を私が聞いたのです。それは実に感動的なひと時でした。何故なら、講演中にレヴィ・ストロースが一番強調していたのが、西洋と日本との違いだったからです。西洋と東洋ではありません。西洋と日本なのです。レヴィ・ストロースは、中国はむしろ西洋に近いが、日本と西洋は真逆であると言いました。何が違うかと言うと、西洋は「押す」が日本は「引く」とまで言い切ったのです。挨拶の際に日本人がお辞儀をすることも紹介しましたが、それよりもこの人類学者が身振りで強調したのが「このぎり」でした。日本では自分に向かつて、つまりのこぎりを「引いて」木を切るが、西洋ではこのぎりを「押し」切ると。私にも初耳でした。レヴィ・ストロースはまたサビアと同じように、仕草や身振りと、言語の構造に関連があると言っています。アリストテレス以来の西洋哲学は、その基本がギリシャ

語の文の構造に一致している、とまで明言しました。

レヴィ・ストロースは何度も来日して日本語も日本文化もよく知っており、その後インターネットで見たインタビューでは日本語とフランス語の構文比較までしていましたから、まるで言語学者です。比較された文は「タバコを買って来る」と「je vais acheter des cigarettes」でした。日本語の動詞は「来る」だがフランス語の方は「aller（行く）」だと指摘して、日本語を求心的（centripète）、英仏語は遠心的（centrifuge）と描写したのです。それをまた持論である「日本語は引き寄せる」が「英仏語は押し出す」の傍証としていました。

それを聞いて私が思い出したのは一六三九年から一八五四年まで二百十五年ほど続いた江戸時代の鎖国です。もちろん、朝鮮半島から満州まで軍国主義の帝国日本が領土を広げた時代も確かにありました。でもそれは一九一一年から一九四五年までの三十五年に過ぎません。鎖国していた時代の長さに比べると16%で二割にも及ばないのです。鎖国ほど自分の身を引く国家の姿はありませんよ。それを日本は二世紀以上も続けたのです。そして、その間、日本には江戸の町民文化が開き、平和が続いたのです。さて、これで修士論文とそれに続く文法研究の方向性がいよいよはつきりました。先ず、オタワで働いていたサビアが「母語が世界観に深い影響を与える」と主張していたことを知りました。続いて、ケベック市での講演会でレヴィ・ストロースが、「日本と西洋は仕草も考え方も正反対である」と教えてくれました。そうした中で、私が教え出した外国語としての日本語が相当英語やフ

ランス語と発想が違っていることを、多くは学生からの質問を通じて気づかせてくれたのですから、そこから次のステップは、もう明らかでした。それは、基本文の構造にあるに違いない決定的な違いを発見するという課題だったのです。

この最終段階で三人目の恩人が出現しました。それが三上章という名前の日本人の文法研究家です。

日本語の文の構造を三上文法に教えてもらおう

最初に面白いと思ったのが「富士山が見える」という文です。これは「富士山を見る」とは大違いです。「見える」の方はいわゆる自動詞で、そこに「私」は意識されていません。文には出てこない「私」に向かって富士山の姿が迫ってくる。つまり矢印は富士山から私へと向かっています。「富士山を見る」では矢印の方向が逆で見ている「私」からの富士山へ視線が向かいます。そこで気がついたのは、英語やフランス語なら、このどちらも「I see Mt.Fuji (見える)」、「I look at Mt.Fuji (見る)」と他動詞構文になるという違いです。英仏語では常に自分が視線を押し出すのに、日本語では自分に向かう視線を受け止めることがあるとすると、これまたレヴィ・ストロースが主張した「押す英仏語」と「引く日本語」の別の例であると気がきました。

日本語を教えていて「日本語が分かります」という文を使いました。するとこの文がフランス語にできないのです。いえ、翻訳可能な文が多すぎるのです。学生たちは「Je comprends le jap-

onais」という意味の文に「私」が出てこないのは考えられないと言います。私は仕方なく妥協して「私は、日本語が分かります」と変えました。すると学生はこの文の主語は「私は」か、それとも「日本語が」なのか、どちらかと聞いてきました。いわゆる「ハとガの違い」ですね。教師の私には大きな疑問が残りました。例えば「○○さん、日本語が分かりますか」と聞かれて、その答えなら「はい、分かります」だけで十分です。「日本語が分かります」と「日本語」を繰り返す必要はありませんし、ましてや「はい、私は日本語が分かります」と答えることは、日本人ならまずありえないと確信しました。なぜ日本語では「はい、分かります」だけでいい文なのか、こう答えた方が日本語としてずっと自然なのかを考えていた時に、三上章の文法が私の疑問を全てを解決してくれたのです。友人が「象は鼻が長い」という本を送ってくれたのです。それを読んで私の目からウロコが落ちました、三上さんは、日本語の構文に主語はいらないと主張していたのです。

こちらが三上さんの写真です。三上さんが三番目の恩人なのですが、三名全員がカナダと不思議な縁があると言いましたよね。三上さんはカナダとどういう関係があったのでしょうか。

カナダとの縁は、サビアがオタワでレヴィ・ストロースがケベック市だとすると、三上さんと関係があるのはモントリオールです。実は、三上文法に助けられて修士論文と博士論文を書いた後、私は文法に関する本を何冊か日本で出版しました。その一冊が三上章の評伝で、これは二〇〇六年に出版されました。この本を当時の広島市長だった秋葉忠利氏が読んでくださったのです。

三上さんは広島出身で、広島は一九九八年からモントリオールと姉妹都市になっていたのです。姉妹都市の交流行事で秋葉さんがモントリオールにいらした時、私は市長の通訳を務めました。すると初対面だった私に秋葉市長が「金谷さん、広島に来て三上さんについて講演をしてください」とおっしゃって下さったのです。これも、モントリオールが広島と姉妹都市だったからこそのご縁です。

では、ごく簡単にですが、三上文法をご説明しますね。日本語は述語一本立て、つまり述語だけで基本文となる、という極めて明快な主張です。これに対して英仏語のような西洋語は主述二本立て、つまり全ての文に主語がなければいけません。特にフランス語に明らかですが、主語がなければ動詞が活用できないので文とならないのです。英語は動詞活用を時代とともに次第に失い、今ではいわゆる「三単現のS」だけが残っていますが例えば「*He is*動詞」と呼ばれるものは現在までしつかり活用を保っています。三上文法によれば、「分かります」だけで文となれるので、それを知った私は感動し、悩みから解放されました。それからは、学生の作文から人称代名詞と呼ばれるものをどんどん消していったのです。例えば、「マリーさんに会いましたか」はいいのですが、その答えの「はい、私は、彼女に会いました」は日本語では完全に悪文です。「私は」も「彼女に」も消した「はい、会いました」が一番自然な日本語の文なのだと胸を張って説明できたのは三上文法のおかげです。

こうした、英語ではSVO（主語、他動詞、直接目的語）で表現さ

れる状況が日本語では主語が消えてしまい、述語は自動詞を使った動詞文、あるいは形容詞文、名詞文になってしまう例が次々を発見できたのです。

今見たばかりの「見える」が目ならそれと並んで耳を使う「聞こえる」も自動詞で英語の直接目的語に匹敵する目的格補語（名詞十を）は現れません。主格補語（名詞十が）ならそれが可能です。「ジャズを聞く」、「ジャズが聞こえる」。

「英語が出来る」の「出来る」も同じ自動詞構文ですが、この場合は「出来る」という漢字にも注目しました。「出て来る」と書くのですから、まさに私はそれを引きよせるのです。考えてみると「お米が出来る」と「英語が出来る」は結局同じ動詞で、流暢に英語を話せる人はまるでその口から英語がどんどん流れてくる、というのが本来の意味だったのでしよう。それを見る私は何もしていないので文に現れません。

英仏語でそれぞれ「have」と「avoir」が使われる「所有」も表現も、日本語では単に「そこにいる、そこにある」という存在文になります。人であれば「息子が2人いる」、物であれば「車がある」でちっともSVOの他動詞構文なりませんし、ならないほうが日本語として自然なのです。

それではいよいよ、英語と日本語の典型的な文の組み立てを比較することにしてしましよう。その際に違いがとりわけよく浮かび上がる文は、それぞれの言葉における「愛の告白」だということに私は気がついたのです。

アイラブユーは日本語に直訳できない

実はこれもカナダで日本語を教えていて何度となく学生から出て来た質問なのです。ある日のクラスで、「先生、『Je t'aime』(love you)は日本語でどう言うんですか」と聞かれました。さあ、皆さんならどう答えるでしょうか。「日本人はあまりそんなことは言わないですよ」と文化的説明で逃げる手もありますが、今の若い日本人はそうでもないでしょう。また、そんな答えでは学習者はとても納得してくれません。この質問にどう答えたらいいかを考えて、そこから必ず出て来る英語と日本語における「人称代名詞」と「基本文」の問題点へと繋げてみようと思います。

先ず「人称代名詞」と言われるものについて考えてみましょう。実は英仏語などと日本語では全く「人称代名詞」をめぐる様子は違っています。私は英語の「love you」、フランス語の「Je t'aime」に当る愛の告白の表現は、日本語では(多くの場合、相手の方を見るでもなく、また聞こえないような小さな声で言う)「好きだよ」(女性なら「好きよ」)が一番自然であると思います。その前に相手の名前を言うかも知れませんが。

さて、ここで大切なことは、日本語ではわざわざ「僕は君が好きだよ」とか「私はあなたが好きよ」と言わなくても、充分意味が通じるということです。そもそも、「好きだよ」や「好きよ」と言われて「えっ、誰が? 誰を?」と聞き返すほど勘が悪かったら、気持ちを分かってもらえない可能性はかなり低くなりそうです。ましてや「私はあなたを愛しています」などというような文は、

極めつけの「悪文」というべきもので、出来るだけ使わない方が無難です。こんな風に言われたら、相手から「あなたたつてゲーグル・トランスレーションなの?」と言われそうですが、その理由は簡単です。日本語の「基本文」には、国語の時間には(学校文法で)そう教えられますが、本当は、「主語」や「目的語」が義務的でなく、むしろ言わない方が自然な文だからなのです。

これに対して、英語では「love you」は文ですが、「love」だけではとても文になりませんから、人称代名詞は絶対必要なのですが、日本語にはそんな英語の事情に付き合う義理も義務もありません。

さて、この講演のタイトルは「日本語でアイラブユーをどう言うか」でした。ここまで聞かれて、もう答えは出ましたね。その答えをオギユスタン・ベルクというフランス人の地理学者に聞いてみましょう。『空間の日本文化』(1994)という本の中でこう書いています。

「今から十五年ほど前、パリ東洋語学校で日本語を習い始めていた私は、日本の戦争映画の一シーンに奇妙な感動を覚えたことを記憶している。危険が迫ってきたのもかかわらず、持ち場を離れたくない看護婦がいる。医者が理由を尋ねる。彼女はしばらく黙っているが、とつぜん、目はそむけたまま、医者に「好きです」と言う。フランス語の字幕は『Je vous aime。』」

日本語が世界を平和にする！

るでしょうか。

そろそろ頂いた時間も残り少なくなりました。ここではこれまで述べてきた日本語の特徴、とりわけ英語との違いを踏まえて、私たちの日本語がよりよい世界のために寄与できる可能性を述べたいと思います。紛争の絶えない世界に平和をもたらす思想を日本語がその内部に持っているとは私は深く信じるからです。

私が二〇二二年六月まで二十五年間教えていたモントリオール大学の例で言いますと、嬉しいことに学生数は毎年増加する一方でした。教え始めた一九八七年にはせいぜい25人ほどだった一年生が、最後の数年は軽く100人を越えていました。日本語は、間違いなく重要な国際語の一つとなっていて、日本国外の日本語文法に関する国際学会などでは、かつての学習者同士が立派な日本語で高度な質疑応答を展開する光景などは当たり前前の時代となっているのです。このカールトン大学も日本語教育が盛んですよね。先生たちも大変熱心で、私も効果的な教え方のワークシヨップに講師として何度も呼んで頂きました。次回は来年春に予定されています。

日本語が大人気なのは、実は日本が、日本文化が、そして日本人の優しさや日本の自然が評価されているからです。嬉しいことに、我が国は海外から、それも多くの若者から大変いい印象を受けているのです。日本語を学んだ後で日本に旅行や滞在をして帰ってきた教え子に会って印象を聞いてみると、ほとんどの場合、同じような答えが返ってきます。定番は以下の四点にまとめられ

「自然や庭園などが美しい」

「街並などが清潔」

「人が親切で優しい」

「交通が便利」

そしてこうした印象は、実はアメリカのタイムという有力雑誌が毎年公表している「世界20か国の好感度」の調査結果でも裏付けられています。この調査は世界56か国12万人を対象に実施した大変な数ですから結果は信頼していいものでしょう。

では世界20か国の好感度上位5か国を眺めてみましょう。一位が日本(77%)でした。続いて5%も空いて二位がドイツ(72%)、三位シンガポール(71%)と続き、四位がまた5%下がって米国の(66%)、五位が中国(63%)の順です。なお、中国の好感度は三年連続で五位止まりですが、それに対して日本は二〇〇七年から連続で首位をキープしています。

こうした「日本の評判のよさ」「人気度ナンバーワン」と近年の外国語としての日本語ブームに深く関わっていることは言うまでもないでしょう。

ここだけの話ですが、実は中国に行つた学生はこうまで口を揃えて中国礼賛をしません。明らかに失望し、その後には日本語に鞍替える学生も結構いるのです。モントリオール大学で教えているアジアの言語は現在中国語と日本語のみです。以前は韓国語と

ベトナム語もありましたが学生が十分集まらず廃止されてしまいました。ある日、ふと思いついて、中国語と日本語の学生にその言語を選んだ理由を尋ねてみました。自主的ミニアンケートというわけです。

すると大変面白い結果が得られました。中国語を学ぶカナダ人学生の場合は、明らかに「仕事が出るチャンス」を期待しています。これに対して、日本語の場合は違ふのです。「日本が好きだから」という答えが多く、正直、私は感動してしまいました。ビジネスなど実利ではなく、「日本に対する憧れ」が答えの上位に来るのです。さらに、ある学生に、どうして中国語をやらないの、と聞いたら、こういう答えが返ってきました。そのメモが今でも手許に残っています。「だって、先生。選挙のある国とない国、素晴らしい車を作る国と作れない国でしょ。そりゃあ日本がずっといいですよ。」

日本の何が良いのかと聞くと、この章の上で述べたような、「日本はきれいで便利で清潔、日本人は親切でやさしい」というような答えがいつも返ってきます。そして、多くはホームステイをするのですが、「日本のお母さん」は自分の身になって考えてくれる、と言います。「自分の身になる」という表現は、まさに北山修さんの言う「共視」の思想そのものです。

カナダへも留学生が来てホームステイをしますが、「門限に遅れるな」とか、「部屋がきたないわよ」とか。上から目線・命令調の「規則の押しつけ」がどうしても前面に出る様子です。それに対して、日本のお母さんは学生と同じ目線で「大丈夫。何か困っ

ていない」と言うのです。問題を打ち明けると「そう。困ったわね。じゃこうしない？」と「まるでこちらの心の中にすーっと入ってきたように」考えてくれるのだと。「そういう見方、助けられ方を私は日本に来て、初めて知りました」と、特に女の子は感動して語ります。

日本語を長年教えて気がついたのは、日本語の言葉だけではなく、それを通じて、学習者の世界観まで変わるということでした。いろいろなプログラムを通じて、私は初めのころは毎年数人、退職前の十年ほどは20人ぐらい、ですから合計すると2000から3000人ぐらい学生を日本に送りこみましたが、帰ってくるのと多くの学生が色々な意味で以前と変わっていました。多くは人当たりが優しくなっていました。何と日本語を話して日本で生活していると、本人も気がつかないうちに人格が変わるのです。話し方も変わります。声が変わり、ひそひそ話をするようになります。これは明らかに先ほど数字をご紹介した日本人の話し方の影響です。日本文化に触れて人格や態度が日本的になることをフランス語では「タタミザシオン」と呼びます。豊の生活にふれて性格が変わることです。

そこで改めて納得出来たのが先ほど英語と日本語の基本構文のことです。考えてみると、太郎が花子を愛している、という状況を三上の提案した「コト」で終わる文にすると、「太郎が花子が好きなこと」あるいは「太郎が花子が好きであること」となるのです。つまり「好き」の補語には両方とも「が」がついて「を」は表れません。理由は簡単で、名詞文の「好きだ」は「好きであ

る」という「ある」文、つまり「存在の動詞文」から派生したものだからです。

これはアイ・ラブ・ユーとはまったく違う発想です。アイ・ラブ・ユーでは、主客が完全に分離しています。「アイ」が、上から目線で、「ユー」を愛しているという構造の文で、これは「アイ」と「ユー」の二元論と言っているでしょう。その二つの要素が動詞をはさんで対立し、「アイ」は主語に、「ユー」は直接目的語となります。「太郎が」と「花子が」がどちらも「好きだ」の前に並ぶ日本語とは文の構造がまるで違っています。

つまり、二元論を立てたのがS₂O₂構文というわけです。英語がS₂O₂他動詞構文を多用するのは、話し手とそれ以外を切り離す二元論が思考の基本となっているからでしょう。これに対して、日本人は、本当の感情において、愛という場所に二人して落ち入るわけです。「太郎が花子ちゃんが好きだ」というのは、愛の中に二人がいるという文になります。まるで巾着か風呂敷です。風呂敷の中に同じ（が）を持った二人がいて、愛という状況に二人がいる。つまり好き合っている二人は、英語と違って日本語では全く切り離されていません。二人は隣り合っただけに立ち、同じ方向に視線を溶け合います。こうした「非分離主義」は、まさに思想といていいもので、日本人のこんな世界観が「おはよう」や「ありがとう」や「寒いね」など何気ない日常の表現にさえ表れていることは、最初に述べた通りです。

面白いのは、こうしたことを学生に言うときとびつくりすることです。女子学生の中には「日本語って、何てロマンチックなの！」

とうっとり目をつぶる、あるいは輝かせる者もいるほどです。こうして、日本語の言葉の学習を通じて、学習者の世界観が競争から共同、直視から共視、抗争から共存へと変わって行きます。

実はそれこそがこの章での「世界平和への寄与」の意味なのです。私は二〇〇七年に、久しぶりに訪れた広島で「世界平和への思い」を強くしました。具体的には、平和公園の中の慰霊碑の碑銘「安らかに眠って下さい。過ちは繰返しませぬから」を見た瞬間です。以前から、この二つ目の文を巡って「一体、過ちを繰返さない」と誓っているのは誰なのか」という、「碑文論争」と呼ばれる論争があることは知っていましたが、その日、広島に身をおいて、ふと私には、「誰の過ちか」が明らかにならない方が却って日本語らしくていい、と思えたのでした。

つまり、この講演でこれまで注目してきた「わたし」と「あなた」の共存が、ここでは「敵」と「味方」の形をとっているのではないかと、いうことに思いついたのです。そう考えれば、敵はいつまでも敵ではなくなります。国境を越えて、広く地球という一つの星の上に共存する人類というところまで連帯の和を広げてゆくなら、戦争という異常な状況に敵もまた当事者、そして被害者として巻き込まれていくと考えられるからです。

その思いは、同じ帰国旅行で、広島に続いて訪れた沖縄でさらに強くなりました。生まれて初めて沖縄に足を伸ばした理由の一つは墓参で、亡き父の実弟がこの地で戦死しているのです。叔父の名前の刻まれた慰霊碑が沖縄南部の糸満市にある平和祈念公園内の「平和の礎（いしじ）」にあると母に聞いたので、それに参

ることにしたのでした。母親には、その慰霊碑に刻まれた叔父の名前を写真に撮って来ることも頼まれていたのです。現地に行つて先ず驚いたのは戦後五十年、一九九五年に建立除幕されたという慰霊碑の大ききでした。沖繩戦で亡くなつた軍人と民間人の全ての名前を刻むというのだから予想はしていましたが、その数およそ25万人。それは幾重にも立ち並ぶ壁、壁、壁でありました。犠牲者の名前は出身都道府県別、しかも有難いことに五十音順でしたので、探していた「金谷武文」の四文字はすぐ見つかり、花を手向け、手を合わせました。戦争の終わる六週間前に額に銃弾を受けて亡くなつたのだと言います。享年二四で出征する前は北海道東部の留辺蘂町の小学校で教師をしていたそうです。

ワシントンのベトナム戦争慰霊碑

しかし、慰霊碑の規模よりもさらに驚いたことがあつたのです。それはその慰霊碑に米兵の名前も刻んであつたことです。以前米国の首都ワシントンでベトナム戦争の戦死者の名前が刻んである巨大な慰霊碑を見たことがあります。そこには当然ながらアメリカ人の名前しかありません。広島と沖繩の慰霊碑には共通する思想があります。それは、結局我々は同じ舟の上に乗っている、どこかで繋がっているという共存の思想ではないでしょうか。欧米列強の何世紀にもわたる植民地支配を模範にした日本が「脱亜入欧」「富国強兵」のスローガンのもと軍備を進め、ついに軍部が引き起こした戦争の狂気が通り過ぎた時に、日本人は「共存の

思想」を再び思い出したのでしよう。そして鎮魂のためにこれらの慰霊碑を建て、敵味方の差を超えて犠牲者の名と平和の誓いを刻んだのだと思います。日本語が亡くならない限り、日本語の思想は亡くならないのです。

さて、その全く逆の思想を、我々が現在世界中で見せつけられていることに思いを馳せて下さい。とりわけ二〇〇一年九月一日のあの衝撃的な事件で、一部の国家、とりわけアメリカはずつかり冷静さを失つてしまいました。前大統領ジョージ・W・ブッシュ以下首脳陣は「キレた」のです。大統領が「旗を見せる。敵なのか、味方なのか、どっちだ」と叫ぶ様子はとても正視に耐えるものではありませんでした。フランスの哲学者ボーボワールの「第二の性」冒頭の文を一語だけ変れば、「人はテロリストとして生まれるのではない、テロリストになるのだ」と言えるでしょう。ブッシュには広島や沖繩の戦没者慰霊碑の意味などおそらく理解出来ないに違いありません。

どちらも恐い「原理主義」と「正義病」

九・一一の意味を再び問うなら、当時の大統領ブッシュが問うべきだったのは、「何故こんな状況になつてしまつたのか」という「Why?」でした。そうではなく、「誰が俺たちをやつたのか」という「Who?」しかこの大統領の頭にはなかつたのです。それで「反撃」に転じた結果がその後のイラクとアフガニスタンの泥沼状態でした。ベトナム戦争では共産主義が仮想敵でしたが、

今度の敵はイスラム原理主義です。「目には目を、と言いつけたら人は皆、盲いてしまおうだろう」と喝破したのは無抵抗主義のマハトマ・ガンジーでしたが、その教訓は生かされていません。イスラム原理主義ももちろん御免ですが、私にはアメリカ正義病も同様に恐ろしいのです。その両者が不毛な殺し合いを続けています。実に愚かなことだと言わざるをえません。

次々と起こる大学や高校での乱射事件も「キレる社会」アメリカの崩壊を予告しています。ある資料(2001年)によれば一年間に銃で死亡した人の数は、ドイツ381人、フランス255人、カナダ165人でした。有難いことに銃の取り締まりが厳しい日本ではせいぜい暴力団がらみの事件に限られており、死者の数は39名でした。人口比で言えば、平和で安全と言われるカナダですら日本の十五倍も危険だということになります。

それではアメリカは、と見るとこれが桁外れの数字で、驚くなかれ1万1127人なのです。戦後、日本人があれほど憧れ続けてきた民主主義の象徴、アメリカ合衆国は、カナダの十倍、日本のおよそ百五十倍も射殺されやすい、危険この上ない国となり果ててしまったのです。

藤原正彦はベストセラーになった『国家の品格』(新潮社、二〇〇五年)の中で、日本をこよなく愛した作家、ポール・クローデルの言葉を引用しています。この作家は外交官でもあり、駐日フランス大使として二回の世界大戦の間に五年三か月(1921、1927)、日本に滞在しました。在任中の一九二三年に関東大震災が起こり、その祭には自分自身が被害にあいながら救援活動を指

揮しています。またフランスと日本の文化交流を目的とする文化施設の日仏会館も一九二四年に発足させたのもクローデルです。まことに大正から昭和初期の日本の大恩人というべき人物です。そのクローデルが第二次世界大戦中の一九四三年にある夜会でこう言ったのです。

「日本は貧しいが、高貴であります。

(Le Japon est pauvre, mais noble.)

私が世界でどうしても生き残ってほしい民族をあげるとしたら、それは日本人です」

クローデルは大使として日本に赴任する前に領事として中国の上海、天津などに合計十四年も滞在した外交官です。このスピーチがなされた一九四三年と言えば、日本の敗戦色がしだいに明らかになっていく時期です。しかもフランスにとつて味方は中国(当時は清)であり、日本は敵国でした。既に外交官を引退して作家生活に専念していたとは言え、何故クローデルは中国でなく日本への愛着を表明したのでしょうか。敵国をここまで擁護する発言をするにはかなりの勇氣と覚悟が必要だったに違いありません。

私も藤原の意見に全く賛成です。さらに言えば、混迷する世界を救える思想が日本語そのものに含まれていることを、『日本語が世界を平和にするこれだけの理由』(飛鳥新社、二〇一四年)で明らかにしようと思いました。そして、それだからこそ、今こそ、日本語を明治以来の英文法の呪縛から解放する必要があるのだ

す。

英語に代表される他動詞のSVO構文を基本とする言語の根本的な問題は、その構文が発想として「SとOの分離による二元論」、そして「S(主語)のO(目的語)に対する支配」へと繋がるといふことにあります。さらに、Sには「力」とともに「正義」がしばしば与えられてしまうのが一番危険なのです。英語を始めヨーロッパ言語の話者が何か失敗をしてもあまり謝らないのはそのためでしょう。自分は力を正義が与えられるSの位置を常に保持していきたいと思うからです。

精神分析医の河合隼雄が西洋人と日本人の自我を比較してこんなことを書いています。

「他と区別し自立したものとして形成されている西洋人の自我は日本人にとつて脅威であります。日本人は他との一体的な繋がりを前提とし、それを切ることなく自我を形成します。(…)非常に抽象的に言えば、西洋人の自我は「切断」する力が強く、何かにつけて区別し分離していくのに対して、日本人の自我は出来るだけ「切断」せず「包含」することに耐える強さをもつと言えるでしょう。」

この本で、河合氏は述べていませんが、私は日本人と西洋人の自我意識の違いはその土台に、母語の基本文の組み立て方があると思います。「思考の型を求めていけば基本文型が得られる」と三尾砂は言い切っています。私の著書(『日本語に主語はいらない』(2002)、『英語にも主語はなかった』(2004)、共に講談社選書メチエ)において示したように、日本語の動詞文は盆栽の形をしています

から、日本人が普通そうする様に、わざわざ補語を言わなければその鉢の中に主体も客体も含まれているのです。三上章はそのことを「日本語の基本文は述語一本立て」と言いました。学校文法で教えられるように、日本語はSOV型でそのS(主語)やO(目的語)が省略されるといふのは大きな間違いです。日本語の文が話者の「地上の視点」が基本の立ち位置で、人類が全てどこかで繋がっている、という共存、共生を前提としています。二〇一一年の東日本大震災でもその後の援助、復興活動は「絆(きずな)」という印象的な合い言葉のキャンペーンになったではありませんか。これこそが日本人そして日本語が世界を救える力なのです。日本語に対して、主体と客体を切り離す二元論的な英語とはまさに真逆、正反対の思想といふべきものです。

近年、アメリカは明らかに「正義病」国家となり、世界のあちこちに軍隊を送り込んでいます。これは、自分が反省出来ない「SVO脳」にその原因があると私は思います。イスラム原理主義も自分たちに正義があると思いついて聖戦(ジハード)を展開してきますから、発想を変えない限り、両者の戦いは永遠に続くしかないでしょう。その意味では、今こそ、日本の出番なのです。日本的な共存、共生の思想は大袈裟でなく、地球を救える力を持つているのです。その力の源泉が日本語であることこそ、今日のお話が明らかにしようとしてきたことなのです。皆さん、ご静聴、有難うございました。どうぞ良い一日をお過ごし下さい。(盛大な拍手。うち数名は立ち上がり「ブラボー」と叫ぶ)

(元モントリール大学東アジア研究所日本語科長)

●金谷武洋 (かなや たけひろ)

一九五一年北海道生まれ。函館ラ・サール高校から東京大学教養学部卒業。ラヴアル大学で修士号(言語学)、モントリオール大学で博士号(言語学)取得。専門は類型論、日本語教育。カナダ放送協会国際局などを経て、二〇一二年までモントリオール大学東アジア研究所日本語科科長を務める。

※著書

- 『日本語に主語はいらない―百年の誤謬を正す』講談社選書メチエ、(2002年)
- 『日本語文法の謎を解く―ある「日本語」とする「英語」ちくま新書、(2003年)
- 『英語にも主語はなかった―日本語文法から言語千年史へ』(講談社選書メチエ、2004年)
- 『主語を抹殺した男／評伝三上章』(講談社、2006年)
- 『日本語はじびない』(ちくま新書、2010年)
- 『日本語は敬語があって主語がない―「地上の視点」の日本文化論』(光文社新書、2010年)
- 『日本語が世界を平和にするこれだけの理由』(飛鳥新社、2014年)

※雑誌特集

『金谷武洋の日本語論』(『季刊 iichiko』no.113, winter 2012)

日本語・述語制の
日本文化論の本

各128頁 1500円+税
文化科学高等研究院出版局

